

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：24601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04830

研究課題名(和文) 専門プログラムを用いた発達障害児支援者養成システム作りに関する研究

研究課題名(英文) Study on making of children with developmental disorders supporter training system using the specialized program

研究代表者

岩坂 英巳 (Iwasaka, Hidemi)

奈良県立医科大学・医学部・研究員

研究者番号：70244712

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：幼児期から青年期までの発達障害児・者への心理社会的専門プログラムの開発と実践、さらにそのプログラムを実践できる支援者養成ネットワーク構築を行った。
主な成果として、(1)ペアレント・トレーニング(PT)の基本プラットフォームについて、厚労省支援事業と連動させることで、内容(コアエレメント、運営、支援者養成)について国内のコンセンサスを得ることができた。(2)ソーシャルスキルトレーニング(SST)について、青年期対象の就労準備プログラムを開発と実践、さらに普及に繋がる仮想エージェントによるコミュニケーション訓練を導入した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、青年期発達障害者へのSSTとして、就労準備プログラムを開発し、実践したことである。特に奈良先端大学院との共同研究として仮想エージェントによるパソコン画面上でのコミュニケーション訓練の有効性を確認し、それをAI(人工知能)を持つエージェントに発展させるCREST研究に繋げることができたことは、普及への足掛かりとして社会的にも意義が大きい。PTの基本プラットフォームを実践しつつ、その内容についての国内コンセンサスを得られたことも、今後の支援者養成ネットワーク構築に大きく貢献するものである。

研究成果の概要(英文)：I performed development and the practice of the psychosocial specialized program to children and youth with developmental disorder, the supporter training network construction that could practice the program more.

(1) As main result, I was able to obtain domestic consensus about contents (core element, administration, the supporter training) about a basic platform of the parent training (PT) by linking Ministry of Health, Labour and Welfare support project. (2) About social skills training (SST), I practiced a working preparations program for the youth with developmental disorder, and introduced communication training by virtual agent which led to the spread more.

研究分野：児童精神医学

キーワード：発達障害 心理社会的治療 ペアレント・トレーニング SST 就労準備プログラム 基本プラットフォーム こどものQOL

1. 研究開始当初の背景

ADHD など発達障害への心理社会的治療・支援の重要性については、国内においては 2000 年頃から注目され、実践されてきており、本邦においても厚生労働省研究班による「ADHD の診断と治療のガイドライン」において、PT や SST などの専門プログラムが推奨されている。そして、発達障害者支援法(2005)、特別支援教育(2007)で早期からの支援が重要視されてくる中で、2016 年からは障害者差別解消法がスタートすることで、成人期も見据えたライフサイクル全般での包括的かつ継続的な支援が身近な生活場面で必要となってきた。このようにライフサイクルでの支援を考えた場合、希望した時に必要な専門プログラムを受けられること、さらに疾患特異性尺度だけではなく、本人の社会性、自尊感情、QOL に注目して評価すること、そして青年期以降の支援も継続することが重要になってくる。しかし、現時点ではニーズに比べて、専門プログラム実施機関が少なく、「待ち」の期間が長くなったり、質の担保がされていない支援が増えてきたりなどの課題がある。特に早期支援の鍵として厚生労働省の施策としても重要視されている PT については、ニーズの高さから、全国でさまざまなプログラムが実施されてきており、地域の実情と参加者のニーズに沿ったプログラムの提示と支援者(インストラクター)の養成が喫緊の課題である。さらに、青年期発達障害(特に ASD)へのコミュニケーションを伸ばす支援プログラムの開発も強く望まれている。

本研究代表者は、上記の診断治療ガイドラインにもかかわるとともに、「ICT 教材を用いた支援者養成による発達障害児支援プログラムの開発と実践」(基盤 B、2011~2015)により、PT や SST の日常生活場面と年齢に応じたプログラムの開発と実践、普及を一貫して行ってきた。これらの臨床研究の成果を発展させ、多くの発達障害児・者とその家族に還元していくためには、これまで培ってきた専門プログラムを簡易にしつつも有効性が保たれているプログラムを開発すること、そしてそのプログラムを実施できる機関・支援者を全国レベルで増やしていくこと、そしてその際には、評価が難しいと言われる心理社会的治療の効果判定を併用してエビデンスを蓄積していくことが強く求められる。本研究においては、これらの課題に対応していくために、PT の基本版の開発と運用も含めた研修マニュアルの策定、オンラインも利用した全国展開できる研修システム・ネットワークの構築、これら心理社会的治療の効果判定による質の担保も行っていく。さらに、全国的な課題である青年期発達障害者への SST プログラムの開発にも取り組む。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえて、本研究は以下のことを行う。

PT 基本プラットフォーム(*1)を完成するとともに、運営マニュアルを策定して、医療 保健、福祉機関との連携の元に全国的に実施していく

全国の PT 実施機関、研究者間のネットワーク化を進め、基本プラットフォームの普及とオンラインも活用した PT インストラクター(*2)研修システムの構築を進めていく

青年期 ASD の基本コミュニケーションを伸ばしていけるパソコン上のエージェントを活用した SST プログラム(*3)を開発するとともに、医療 就労支援機関との連携を元にして実施していく

なお、これらのプログラム実施においては本人ならびに家族のニーズを優先しつつ、常に事前のアセスメントと適応の検討を行ったうえで、過剰な実施とならないような配慮も行っていく。

*1 PT 基本プラットフォームとは、ADHD、ASD など発達障害児あるいは発達障害疑い児の親に対する全国の PT の共通するコア部分として提示するプログラムである。

*2 PT インストラクターは PT プログラムの進行を担う支援者であり、発達障害、行動療法、グループワークの基本知識と技術を要することが求められる。PT 普及において不足しているインストラクター養成が最も大きな課題となっている。

*3 コンピュータ画面上のエージェントとの基本コミュニケーション練習を通常の SST の流れ(導入、練習、フィードバック)で行うことができるため、より多くの機関での実施が可能。

3. 研究の方法

PT については基本プラットフォームと運営マニュアルについて、国内の主だった PT 研究者・実施者の協力のもとに完成し、あわせて評価パッケージについても決定して、各地で研修会を行っていく。研修会については必要に応じてオンラインも活用しながら、全国で拠点機関を定めて、ネットワーク化していく。SST については青年期 ASD の基本コミュニケーションプログラムを分担研究者とともにエージェントシステムの進化も含めて開発し、医療機関で実施しながら、就労支援機関と連携していく。

4. 研究成果

本研究を通して、下記の成果が得られた。

(1) PTの基本プラットフォームの確立

基本プラットフォーム構想は、本研究代表者および日本ペアレントトレーニング研究会にて推奨してきたが、国内にて様々な形で発展して実施されているPTの共通部分を明示することは困難であった。その理由としては、ADHDへの集団プログラムから発展したものの、ASDへの個別プログラム(ABC分析)から発展したものが主流としてあり、その専門性や対象者に差があることが大きかった。研究代表者は分担研究者(式部、久保)らと基本プラットフォームに沿ったPTを実施してその効果検証を積み重ねるとともに、令和元年度の厚労省支援事業において日本発達障害ネットワーク(JDD net)が行ったPTに関する研究課題において、分担研究者(井上、中田、式部)らとともに参加して、下記の通り、基本プラットフォームを確立することができた。

基本プラットフォームとは、「コアエレメント(図1) 運営の原則、実施者の専門性」から構成されており、参加者のニーズに合わせてコアエレメントの順序や強調したい点を実施者が選択できる。運営に関しては、グループで5回以上のセッションを持つこと、講義だけでなく、演習やロールプレイ、家庭での実践も含めることが必要である。実施者の専門性については、

コアエレメントの内容を理解して親に伝えることができること、発達や行動療法、グループワークなどのスキルが求められることが求められる。そして、実施者養成研修については、これら基本プラットフォームに沿った研修体制が望ましい。以上のことについてコンセンサスを得ることができた。

図1 PTにおけるコアエレメント
(ペアレント・トレーニング実践ガイドブックより引用)



参照 WEB)発達に気になる子どものペアレント・トレーニングマニュアルブック
<http://iwasaka-kaken.jp/htdocs/>

(2) SSTの成人期発達障害就労準備プログラムの開発と実践

成人期発達障害者にとって就労が重要であることは言うまでもない。しかし、成人期発達障害者は得意不得意の個人差も大きく、就労受け入れ先も支援のポイントが見えづらい点が、就労への大きな壁となっている。また、これまで精神障害者に行われていたSSTプログラムは参加者の自由度が大きく、枠組みがないと混乱しやすい発達障害者にはそぐわないものであった。

そこで、表1の内容にて成人期発達障害に特化したSSTプログラムを開発して、実施した。また、参加者が1対1からの基本コミュニケーション(「聞く」「話す」)を練習しやすいように、奈良先端大学院で開発されたパソコン上のエージェントによる訓練(図2、自動ソーシャルスキル 트레이ナー)もプログラムの中に取り入れた。現在4クール目を実施中であり、データを蓄積中であるが、就労準備性スキル、自己効力感は上昇する参加者が多くみられている。さらに、自動ソーシャルスキルトレーナーにおいても、訓練ターゲットである「うなづく」「笑顔」「大きな声」などで上昇する参加者が多かった。

表1. 就労準備プログラウ開催日程と内容

説明会	JOBy説明会・オリエンテーション・面談
第1回	社会的場面での基本マナー
第2回	就労前生活と就労後生活の比較
第3回	就労場面での「頼み方」「断り方」
第4回	中間の振り返り
第5回	作業体験
第6回	共同作業
第7回	ストレスとストレス発散方法
第8回	伝え方と相手の気持ち
第9回	まとめ
第10回	実習先見学と個別目標設定
	福祉事業所での実習(3日間)
第11回	実習後の振り返り



参照)

Hiroki Tanaka, Hidemi Iwasaka, Satoshi Nakamura, Analysis of Conversational Listening Skills toward Agent-based Social Skills Training, Journal on Multimodal User Interfaces,

(3) その他の成果

学校版 PT

学校や園において、教員が発達障害のある、あるいはその傾向のある児童生徒に対して PT の内容に沿った行動理論を活用してかかわることも大切である。石井らは、PT 学校版を受けて発達障害のある高校生にかかわった教師（治療群）13 名と PT を遅れて受けた対照群 17 名を比較した。その結果、治療群において生徒の行動や社会的反応、そして教師自身の自己効力感が増していることを示した。

参照)

Atsuko Ishi, Hiroko Okuno, Takayoshi Nakaoka, Hidemi Iwasaka, Masako Taniike. Effectiveness of a Teacher Training Program for Students with Symptoms of Developmental Disorders: Data from a Correspondence High School in Japan International Journal of Environmental Research and Public Health (Accepted)

QOL 尺度の活用

心理社会的治療を行う際の評価尺度として、本人自身の主観的 QOL を把握することは治療計画を立てるうえで重要である。本研究では、らが信頼性、妥当性を検証済みである日本版子どもの QOL 尺度である J-Kidscreen52 を用いて、子どもの発達特性との関連、あるいは不登校児の QOL の特徴について検証した。松浦らは、病院受診した不登校群 70 名と年齢と性別をマッチさせて対照群 105 名を比較したところ、不登校群では優位に QOL 尺度全般が低下しており、精神科診断名がつく場合は QOL が低い傾向があったが、ASD に関しては QOL の低下は認められなかった。また、自尊感情が不登校群の QOL に影響を与えていた。これらのことより、不登校児への介入の際に早期に診断につながる評価を行うことと自尊感情に注目した介入を行うことが重要であることが示唆された。

参照)

Satoko Nezu, Hidemi Iwasaka, Norio Kurumatani et.al.: Reliability and validity of the Japanese version of the KIDSCREEN-52 health-related quality of life questionnaire for children/adolescents and parents/proxies, Environ Health Prev Med, online, Dec.2014

Hiroki Matsuura, Hidemi Iwasaka, Satoko Nezu, Toyosaku Ota, Kosuke Okazaki, Kazuhiko Yamamuro, Yoko Nakanishi, Naoko Kishimoto, Junzo Iida, Toshifumi Kishimoto Influence of Self-Esteem and Psychiatric Diagnosis on Health-Related Quality of Life in Children and Adolescents With School Refusal Behavior. Neuropsychiatr Dis Treat. 2020 Mar 31;16:847-858. doi: 10.2147

謝辞) 本研究遂行にあたって、研究代表者が 2019 年 5 月に急病から長期療養となる不測の事態となりましたが、分担研究者や研究協力者のみなさまのおかげで終了することができました。データ分析が不十分な部分やさらなる発展が期待される部分については、分担研究者や日本ペアレントトレーニング研究会、奈良県立医科大学精神医学教室の協力者のみなさまに引き継いで行ける見通しです。この場を借りまして熱く御礼申し上げますとともに、発達障害への心理社会的治療の普及、発展を心より祈念いたします。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岩坂英巳	4. 巻 47
2. 論文標題 ADHDの心理社会的治療 - 小児期から青年期まで -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 臨床精神医学	6. 最初と最後の頁 573 -579
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩坂英巳	4. 巻 44
2. 論文標題 発達障害のペアレント・トレーニング	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 精神療法	6. 最初と最後の頁 175-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hiroki Tanaka, Satoshi Nakamura, Hidemi Iwasaka et.al.	4. 巻 12
2. 論文標題 Embodied Conversational Agents for Multimodal Automated Social Skills Training in People with Autism Spectrum Disorders	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 PloS One	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩坂英巳	4. 巻 145
2. 論文標題 ペアレントトレーニングとソーシャルスキルトレーニング	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本医師会雑誌	6. 最初と最後の頁 2361-2365
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩坂英巳	4. 巻 3
2. 論文標題 障害年金のガイドラインについて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 脳と発達	6. 最初と最後の頁 200-202
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浦谷光裕、岩坂英巳、太田豊作、飯田順三ら	4. 巻 57
2. 論文標題 ソーシャルスキルトレーニング前後の注意欠如・多動症の事象関連電位	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 児童青年精神医学とその近接領域	6. 最初と最後の頁 438-449
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kazuhiko Yamamuro, Toyosaku Ota, Junzolido, Hidemilwasaka et.al.	4. 巻 73
2. 論文標題 Event-Related Potentials Correlate with the Severity of Child and Adolescent Patients with Attention Deficit/Hyperactivity Disorder	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Neuropsychobiology	6. 最初と最後の頁 131-138
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1159/000444490	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kaneko S, Kato T, Makinodan M, Iwasaka H. et al.	4. 巻 12
2. 論文標題 The Self-Constual Scale: A Potential Tool for Predicting Subjective Well-Being of Individuals with Autism Spectrum Disorder.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Autism Research	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hiroki Tanaka, Hidemi Iwasaka, Satoshi Nakamura	4. 巻 14
2. 論文標題 Analysis of Conversational Listening Skills toward Agent-based Social Skills Training,	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal on Multimodal User Interfaces	6. 最初と最後の頁 73-82
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Hiroki Matsuura, Hidemi Iwasaka, Satoko Nezu, Toyosaku Ota, Junzo iida et.al.	4. 巻 16
2. 論文標題 Influence of Self-Esteem and Psychiatric Diagnosis on Health-Related Quality of Life in Children and Adolescents With School Refusal Behavior.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Neuropsychiatr Dis Treat	6. 最初と最後の頁 847-858
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2147	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Atsuko Ishi, Hiroko Okuno, Takayoshi Nakaoka, Hidemi Iwasaka et.al	4. 巻 -
2. 論文標題 Effectiveness of a Teacher Training Program for Students with Symptoms of Developmental Disorders: Data from a Correspondence High School in Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Environmental Research and Public Health	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩坂英巳	4. 巻 22
2. 論文標題 保護者の支え方ーペアレント・トレーニングを中心にー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 チャイルドヘルス	6. 最初と最後の頁 749-752
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 式部陽子	4. 巻 46
2. 論文標題 発達障害者支援センターから地域へ 保健師をファシリテーターとしたペアレント・トレーニング	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アスペハート	6. 最初と最後の頁 38-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石崎優子、古川恵美、岩坂英巳	4. 巻 23
2. 論文標題 フィンランドの子どもの医療・福祉・教育から学ぶ フィンランド視察とユヴァスキュラ・日本国際カンファレンスの概要	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 チャイルドヘルス	6. 最初と最後の頁 44-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 田中宏季、岩坂英巳他
2. 発表標題 「話を伝える」および「話を聞く」スキル訓練を目指した児童SSTの試み
3. 学会等名 第59回日本児童青年精神医学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松浦広樹、岩坂英巳他
2. 発表標題 不登校児のJ-KIDSCREEN による6か月後のQOL評価
3. 学会等名 第59回日本児童青年精神医学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩坂英巳
2. 発表標題 ペアレントトレーニングの効果
3. 学会等名 第9回日本ADHD総会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩坂英巳、井上雅彦、式部洋子
2. 発表標題 ペアレント・トレーニング（ワークショップ）
3. 学会等名 第58回日本児童青年精神医学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 久保信代、岩坂英巳た
2. 発表標題 学校不適応、攻撃行動を呈するADHD児への心理社会的治療の症例報告
3. 学会等名 第58回日本児童青年精神医学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松浦広樹、岩坂英巳、飯田順三ら
2. 発表標題 不登校児のJ-Kidscreen - 5 2 によるQOL評価
3. 学会等名 第58回日本児童青年精神医学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 根津智子、岩坂英巳ら
2. 発表標題 小学生の発達行動特性と健康関連QOL
3. 学会等名 第58回日本児童青年精神医学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 古山寛治、岩坂英巳ら
2. 発表標題 成人発達障害就労準備プログラムの取り組みについて
3. 学会等名 第58回日本児童青年精神医学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岩坂英巳
2. 発表標題 成人期発達障害就労準備プログラムの試み(シンポジウム)
3. 学会等名 第22回SST普及協会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山下圭一、岩坂英巳
2. 発表標題 ハートランドしぎさん子どもと大人の発達センター成人の発達障害鑑別外来の動向
3. 学会等名 第60回日本児童青年精神医学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 奥村貴子、金山好美、岩坂英巳
2. 発表標題 成人自閉スペクトラム症の人物画の変化～成人発達障害就労支援プログラム前後での比較～
3. 学会等名 第60回日本児童青年精神医学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福地成、石崎優子、古川恵美、岩坂英巳ら
2. 発表標題 発達障害がある子どもを育てる養親支援の検討～養親インタビューの質的分析からみえること～
3. 学会等名 第122回日本小児精神神経学会総会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	車谷 典男 (kurumatani norio) (10124877)	奈良県立医科大学・医学部・副学長 (24601)	
研究分担者	田中 宏季 (tanaka hiroki) (10757834)	奈良先端科学技術大学院大学・情報科学研究科・特任助教 (14603)	
研究分担者	井上 雅彦 (inoue masahiko) (20252819)	鳥取大学・医学(系)研究科(研究院)・教授 (15101)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中田 洋二郎 (nakata youjiro) (20106214)	立正大学・心理学部・教授 (32687)	
研究分担者	飯田 順三 (iida junzo) (50159555)	奈良県立医科大学・医学部・教授 (24601)	
研究分担者	加藤 寿宏 (katou hisahiro) (80214386)	京都大学・医学研究科・准教授 (14301)	
研究分担者	式部 陽子 (shikibu yoko) (20737431)	奈良教育大学・学内共同利用施設等・特任講師 (14601)	
研究分担者	久保 信代 (kubo nobuyyo) (40449848)	関西福祉科学大学・心理科学部・准教授 (34431)	
研究分担者	佐伯 圭吾 (saeki keigo) (60364056)	奈良県立医科大学・医学部・教授 (24601)	